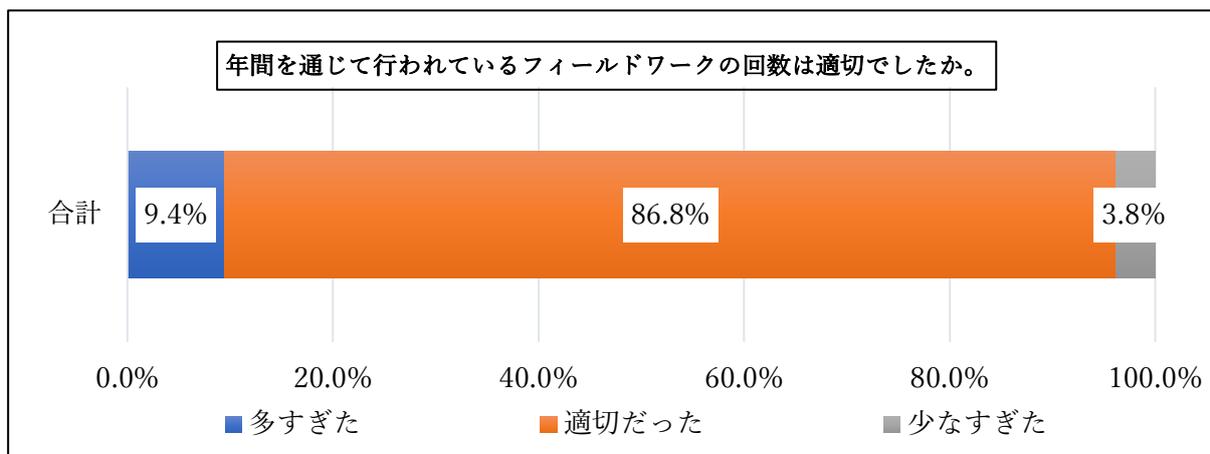
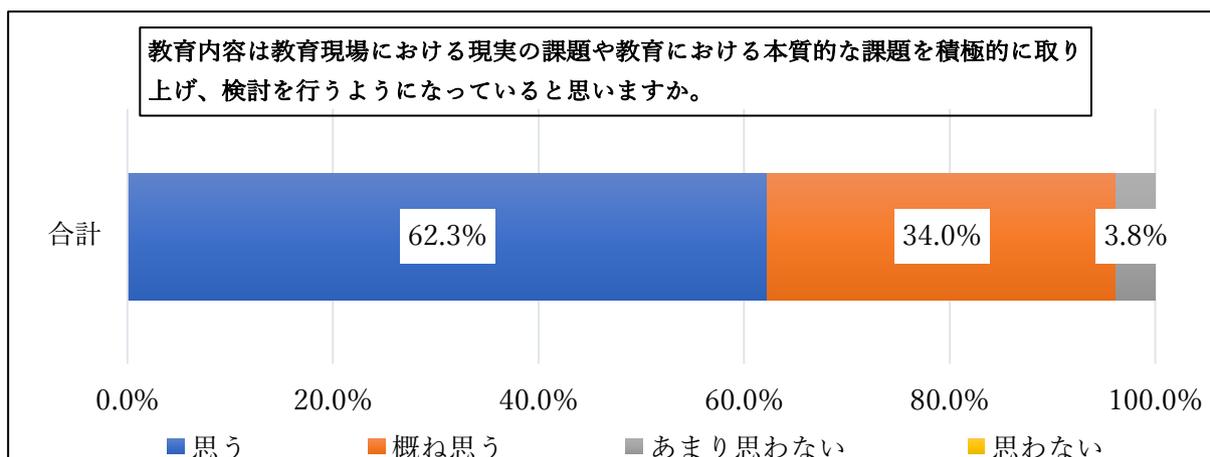
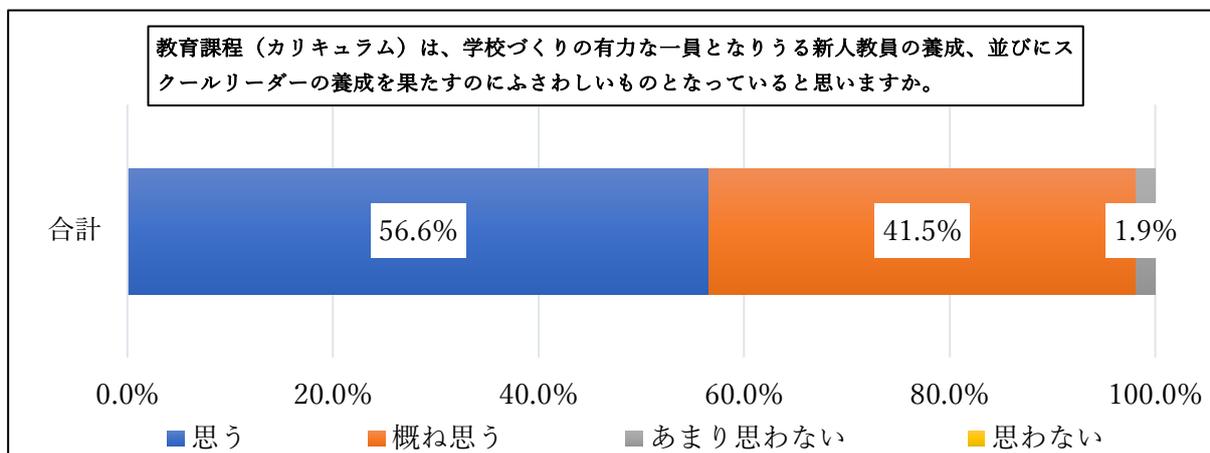
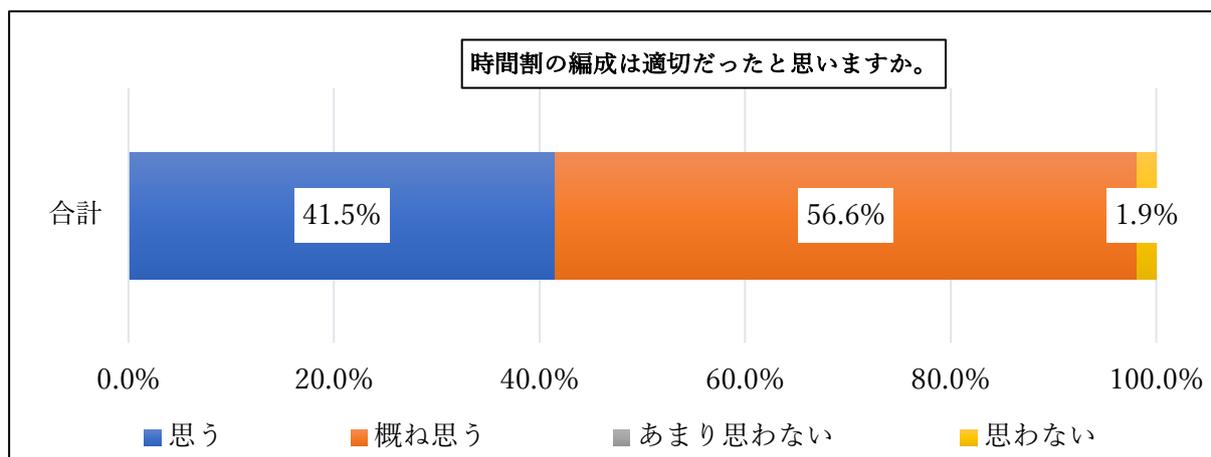


2023 年度「研究科アンケート」

2023 年度の研究科アンケートは 2024 年 3 月に実施され、在學生 22 名、修了生 31 名、計 53 名から回答が得られた。回答結果の傾向及び特徴について、設問区分ごとに以下にまとめる。

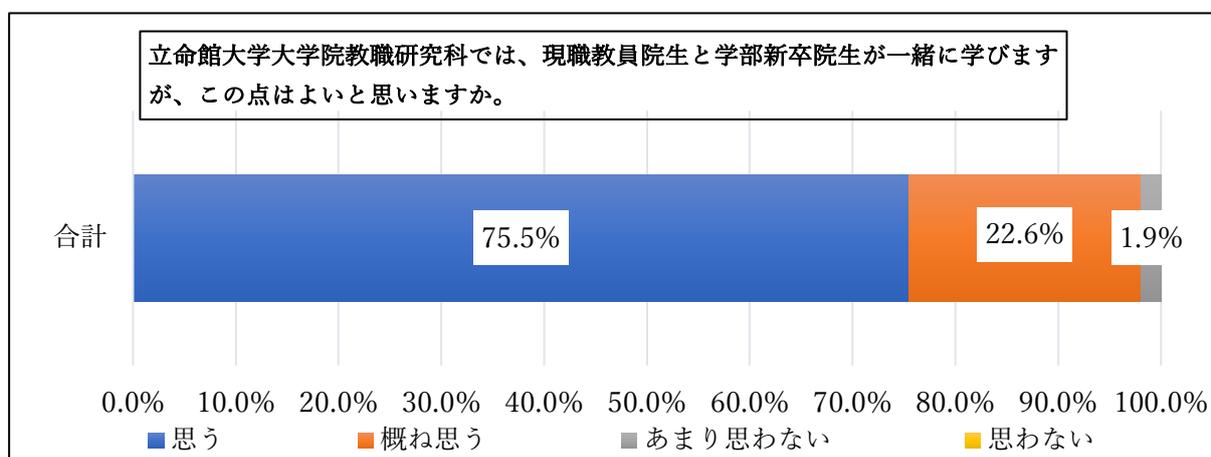
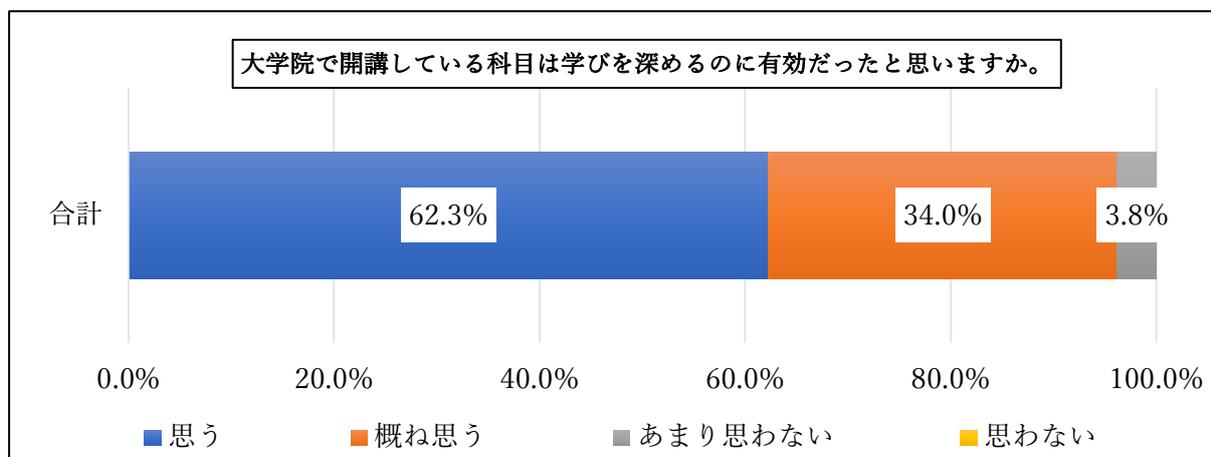
(1) 教育課程について

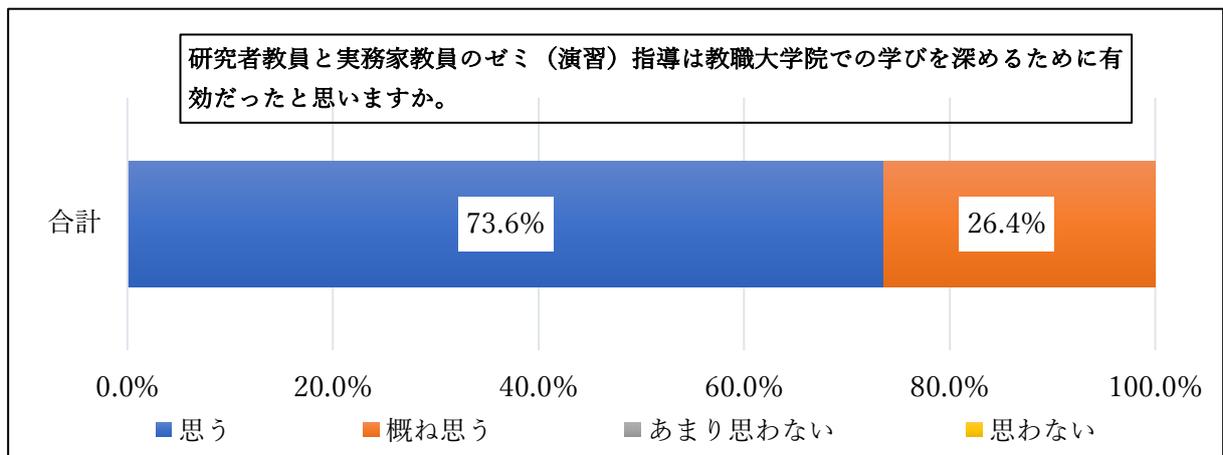
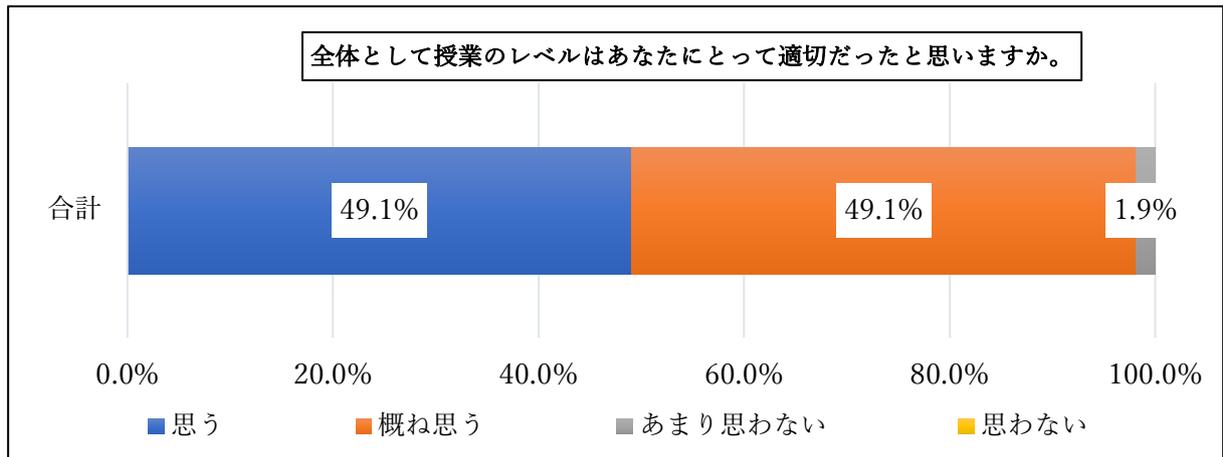




「教育課程について」は、前年度と同様に、肯定的な回答の割合が8～9割以上の良好な水準にある。フィールドワークについてもコロナ禍の影響から回復し「少なすぎた」との回答は縮減した一方、新たなフィールドワーク先の開拓などもあり、「多すぎた」という回答が1割弱となったことから、受講生の他学部・他研究科履修の負担状況等を考慮した調整可能性を模索する必要がある。また、時間割編成の適切性も改善傾向が認められ、新カリキュラムが適用となった当該年度入学生については否定的回答が皆無となった。

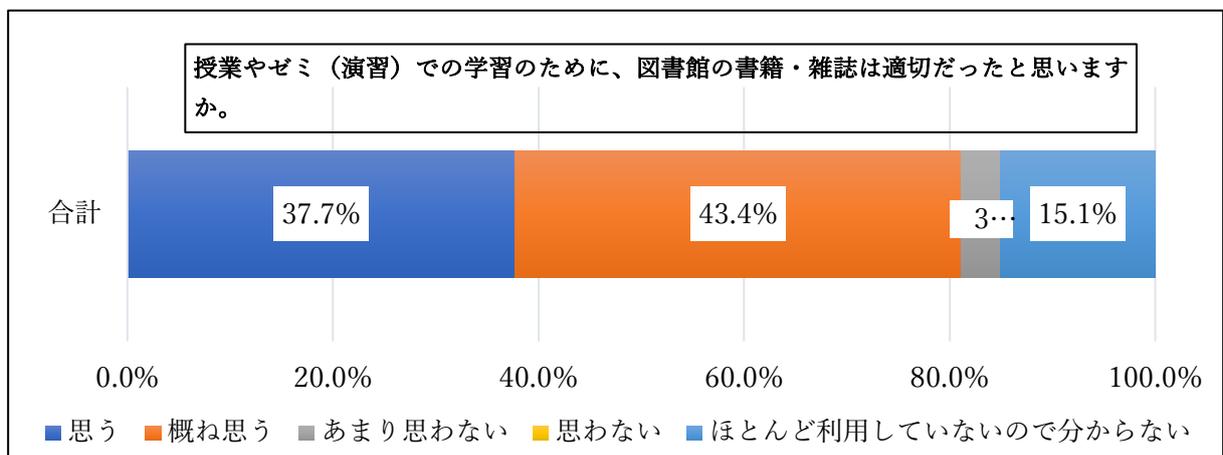
(2) 授業について

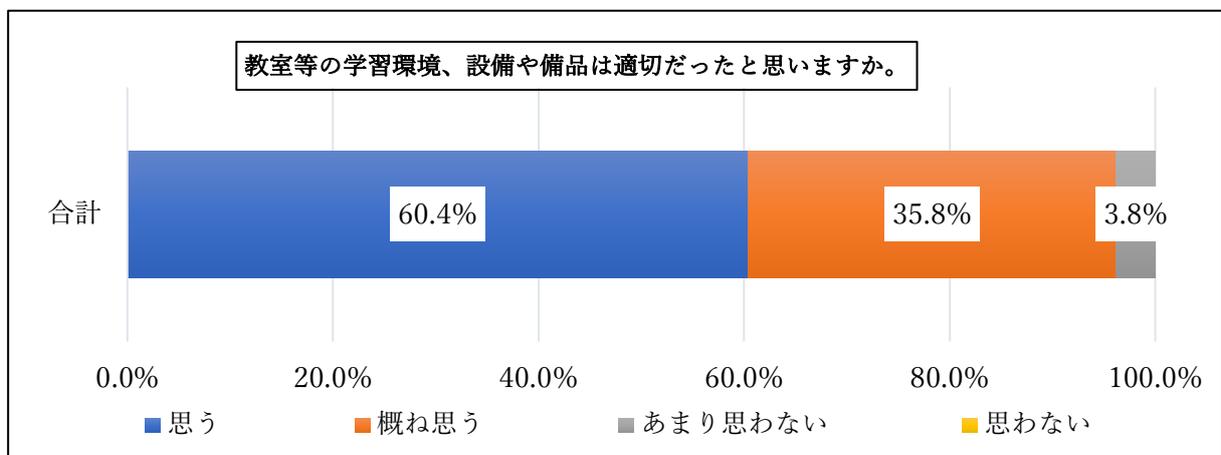
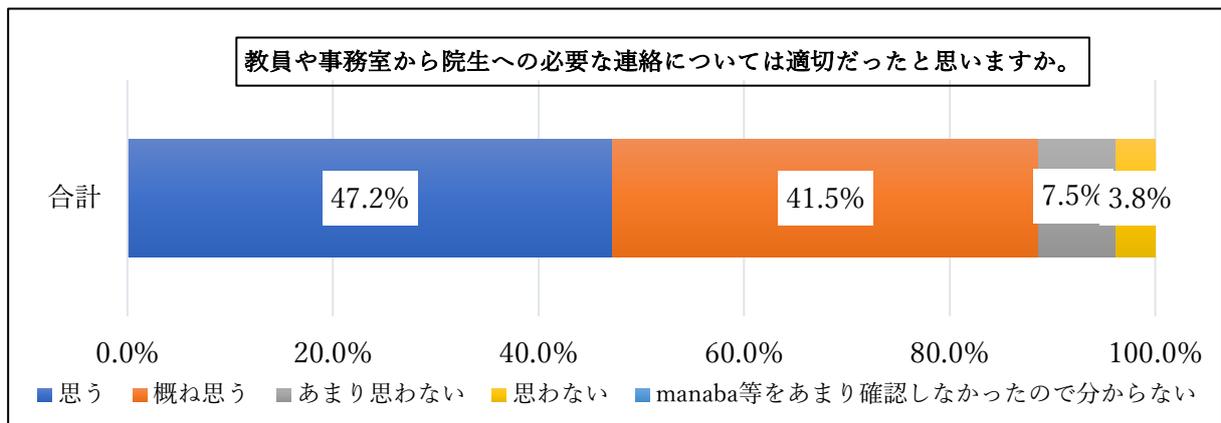
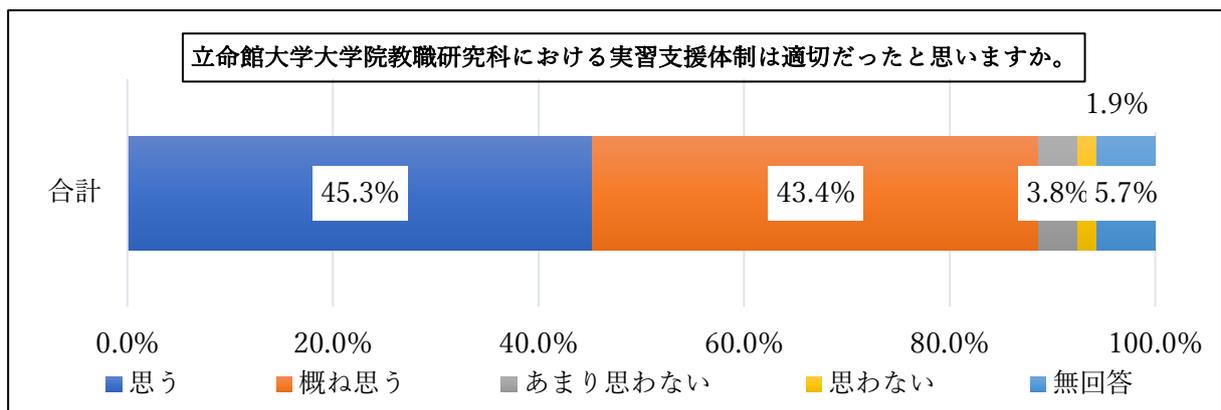
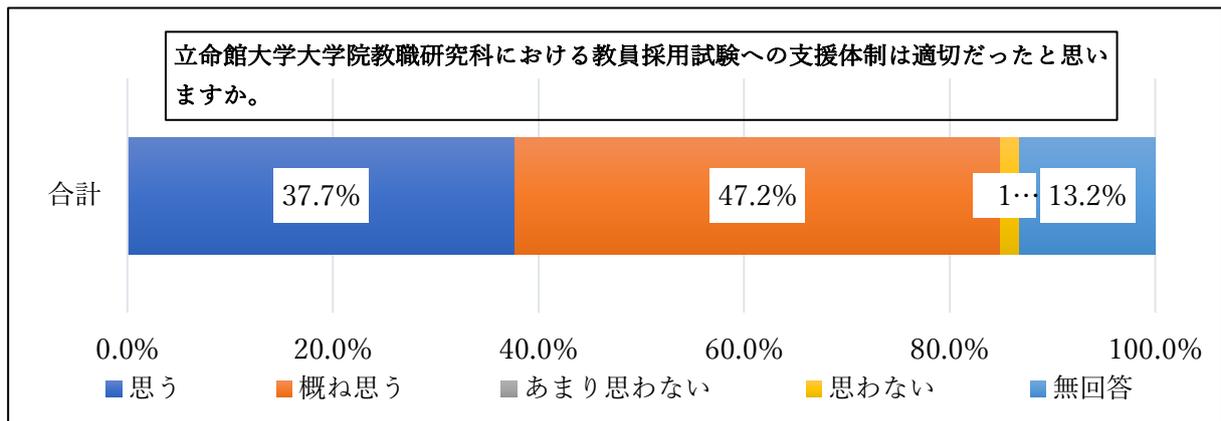




「授業について」の結果も、前年度と同様に、肯定的回答が9割以上の高い水準で維持されている。特に今年度は「研究者教員と実務家教員のゼミ（演習）指導は教職大学院での学びを深めるために有効だったと思いますか。」という設問において、否定的回答が皆無であった。また、グラフには表示していないが、いずれの項目においても、より強い肯定的回答である「思う」の割合が在学生において修了生よりも15~30ポイント程度高くなっていた。これがカリキュラム改善の効果と言えるかどうか、完成年度に向けて今後の推移も引き続き注視したい。

(3) 学生支援について

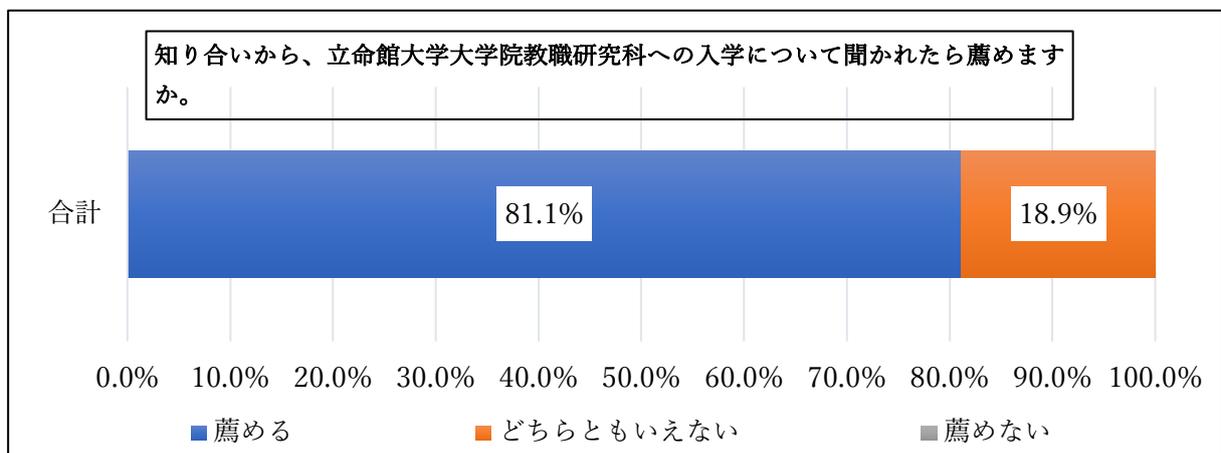
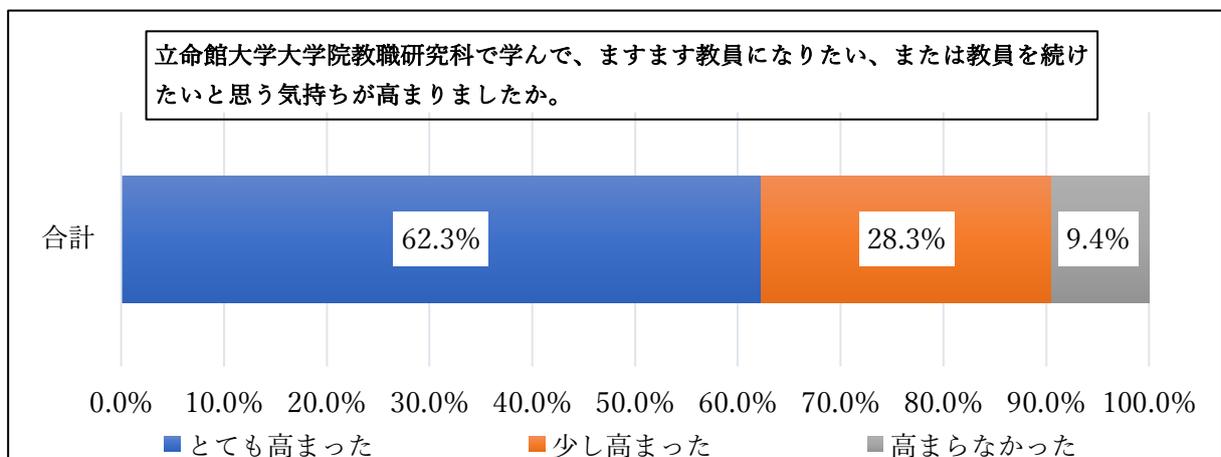
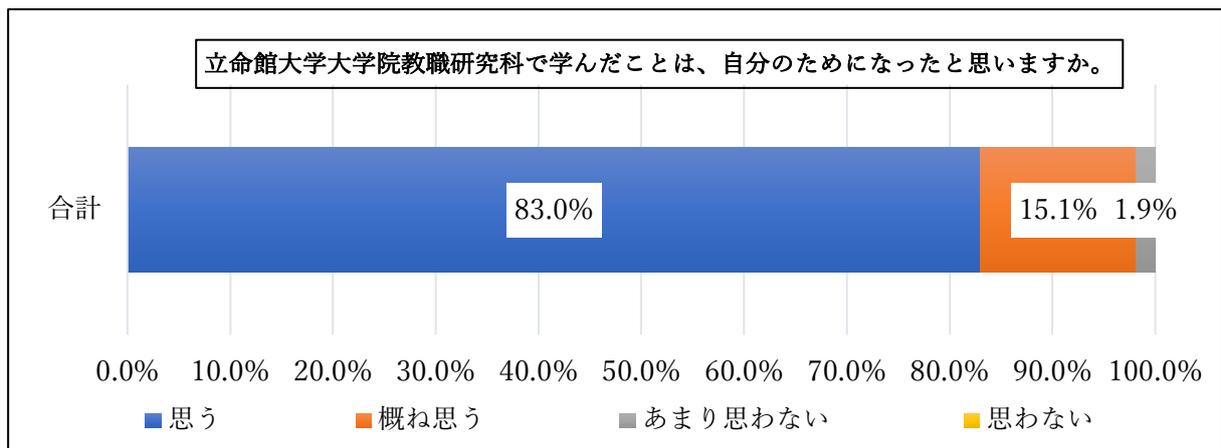




「学生支援について」は、いずれの項目も肯定的回答が8割以上となっているが、主にストレ

ートマスターを対象とした内容項目（教員採用試験への支援や実習支援体制等）もあり、現職教員院生による無回答が含まれている。関連する自由記述では、連携教育委員会・自治体ごとに担当の実務家教員がいること、研究者教員も含め学部時代より質問や相談をしやすい距離感の近さがあり、手厚い支援を受けられることを評価する意見が見られた。連絡体制や設備等については、教職員の異動やオンライン受講制度の開始及びストレートマスターの講師勤務拡大等によるニーズの変化も重なったことによる影響が一部見られるものの、新しい状況に相応しい支援体制が機能している。

(4) 全体を通して



全体的な傾向としては、教職大学院での学びを通して自己の成長を実感するとともに、教職を志望あるいは継続する意欲のさらなる向上が図られている。特に修了生の自由記述からは、多様な教職員と院生が集う環境において、自らの使命や新しい役割を発見・再認識する等、それぞれが専門職としてのアイデンティティを構築し、今後のさらなる学びの機会へとつながったことが推察される。一方、改善の余地がある課題については、2023年度入学生から適用されている新カリキュラムにて対策がすでに講じられている内容も多く、次年度以降にその成果が数字にも表れてくることが期待される。